

中学校区で、中学校配置の学力向上特配（A教諭）を小学校で活用している例（一部教科担当制等）

校名	太田市立強戸小学校									太田市立強戸中学校					
学級数	学年	1	2	3	4	5	6	特支	計	学年	1	2	3	特支	計
	学級数	3	2	2	3	3	2	2	1	7	学級数	3	2	2	2
特配 教員 活用 状況	A教諭（強戸中置籍 週14時間）														
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○6年理科（3時間×2学級）担当</li> <li>○火・水・金曜日の午前中（2～4校時）に授業を行う。</li> <li>○小中連携コーディネーターとして、小6と中1の交流事業設営など積極的に中1ギャップ解消や中学校理解を推進する。</li> </ul>									<ul style="list-style-type: none"> <li>○2年数学TT（3時間×2学級）担当</li> <li>○2年総合的な学習の時間（2時間）</li> <li>○2学年主任、小中連携コーディネーター</li> </ul>					
教科担当	○学力向上特配の1名を小中連携担当とし、兼務発令により、中学校教員の専門性を生かした理科の授業を6年生対象に行う。														
成果 (○) と 課題 (●)	<p>① <b>兼務教員を活用した教科指導の連携による学力向上</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○理科の専門教員による発展的な実験などにより、児童の理科学習に対する好奇心、向上心が高まった。</li> <li>○中学校教員による理科授業の実施により、小中の学習の系統性を明らかにして指導ができるようになった。</li> <li>●TTによる指導を行う中で、個別の支援が必要な児童への支援をきめ細やかに行うことが大切である。</li> </ul> <p>② <b>小中学校の9年間を見通した教育課程の作成</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○小中学校の教員で話し合う機会が増え、中学進学までに身に付けさせたい力を明確にして教育課程を作成することができた。</li> </ul> <p>③ <b>中一ギャップ解消に向けた中学校への円滑な接続</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○中1ギャップの解消のために、児童生徒・教職員の交流を充実させることができた。</li> <li>○児童生徒の交流機会が増え、中学校への不安を和らげることができた。</li> <li>○学習状況や生徒指導など、さまざまな情報の共有が図られ、児童への指導に生かすことができた。</li> </ul> <p>④ <b>小中のつながりを考慮した校内研修、生徒指導での連携</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○小中教職員が互いの授業や行事・活動を参観し合う機会を増やし、学習指導面や生徒指導面での共通理解を図っている。</li> <li>○系統的な学習や生徒指導が行われるように、小中合同で「学習ガイドライン」「生活ガイドライン」を作成し、継続的・計画的な指導を行っている。</li> <li>●小中教職員が多忙な中、合同で校内研修や教科等部会を開催することが難しい。</li> </ul> <p>⑤ <b>兼務教員の活用による学校経営上の効果の検証</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○小中連携コーディネーターを中心として、小6と中1の交流事業設営、乗入れ授業など、小中連携を推進できている。</li> <li>●各校の学校行事などによって、授業変更が必要。標準時数の確保に細心の注意を払う必要がある。</li> </ul>														